

「些事の外交に傾く中国」

ヘンリー・A・キッシンジャーは、自著『外交』（岡崎久彦監訳）の中で毛沢東、周恩来、鄧小平といった往時の中国政治指導者に関して次のような記述を残している。

「この三人は、労を惜しまない情勢分析と国家の長い歴史経験から生み出された知恵という同じ伝統を背後に持つており、恒久的なものと戦術的なものを見分ける直感を有していた。…中国の指導者達の姿勢は、精神的に遠に安定した社会を代表していた。彼らは細かい点を詰めることよりも信頼関係をつくり出すことに大きな関心を寄せた」

周恩来や鄧小平の執政期、我が国の人々の対中感情が概ね良好であったのは、往時の中国の対日姿勢が「白猫であれ黒猫であれ、鼠を捕るのが良い猫である」という鄧小平の言葉に暗示されるように柔軟にして実利的な印象を与えるものであったからである。それは、「ミスター・ニエツト」と呼ばれたアンドレイ・グロムイコに象徴されるよう

中国を情緒的友好感覚で見える誤り

に硬直の傾きを免れなかった往時のソ連の対外姿勢とは、際立った対照を成していた。マーガレット・サッチャーがミハイル・ゴルバチョフを評した言葉を借りれば、我が国の人々は中国に相対しなが

た責を認めなかったり、呉儀中国國務院副総理が来日中に小泉純一郎内閣総理大臣との会談を急遽、見合わせたという結果、国際常識との「乖離」を際立たせる始末である。北京五輪や上海万博のよ

「外交感覚」は、江沢民執政期を経て現在に至って、その劣化を露わにしている。キッシンジャーが多分に瞠目したように、周恩来や鄧小平の現実主義的な政治手腕に惹かれた筆者にとっても、現下の中

いる。けれどもそのような論理は、本来は国際社会の容れるところとはならない。そうであればこそ、我が国が心掛けるべきは、対中摩擦を引き起こしている諸々の難題の様相を広く国際社会の衆人環視

正論



政治学者
東洋学園大学専任講師
櫻田 淳

うな一大国際行事を開催する資格に疑問符を付す声が米国連邦議会から上がるのも、自然な成り行きであろう。

「国際社会に実態知らせよ」

このような中国の姿勢は、筆者には「売家と唐様で書く三代目」の江戸川柳を想起させる。周恩来や鄧小平の時代に示されたような老練な

国政府における「外交感覚」の劣化は、率直に寒心に堪えないものである。

今後の我が国が相対する中国外交は、昔日のグロムイコと同様に辟易させられるところの多いものかもしれない。

昨今の中国の対日姿勢は「日本に対してならば、無理が通れば道理が引く込む」とでも表現すべき論理に拠って

の下に晒すことである。

東シナ海海洋権益の扱いに關しては、我が国政府が主張する「日中間線」それ自体が対中配慮の産物であり、中国がその配慮を無視する形で自らの主張を繰り返しているという事実が、どれだけ国際社会に認知されているのであろうか。

対中外交は他国の共感が不可欠

にして、我が国と中国の何れに「理」があるかを客観的に判断する材料は、我が国の努力の一環として国際社会に適切に提供されなければならない。

「競合と提携の相手と見よ」

我が国にとって中国は、もはや情緒的な「友好」の相手などではなく、実利と権勢の絡んだ「競合」と「提携」の相手ではない。しかも、その「競合」と「提携」が然るべき国際ルールに則るものである以上、もし中国政府が現下の「外交感覚」の劣化を正せなければ、その後に直面するのは、自らの実利における「損失」と国際社会における「威信の低下」である。

我が国にとって対中外交の相手は、ただ中国一国のみではなく、日中関係の動向に影響を受ける幾多の国々である。我が国は、対中関係の運営に際して他の国々の「共感」を獲得すべく手を尽くさなければならぬ。我が国には、対中「感情」に眼を曇らせている暇はないのである。